

## 藤村プロジェクト 2021-23

犀の角と茨城県土浦市の劇団百景社とがタッグを組み島崎藤村の歴史長編小説「夜明け前」の舞台化を目指す『藤村プロジェクト』。一年目の2021年は、「Before the Dawn 夜明け前 第一部」を犀の角にて上演しました。そして二年目となる今年は、昨年第一部の脚本を担当した岸亜弓による第二部の執筆のため、更なるリサーチを重ねています。

## 【リサーチへ行った場所（一部）】

・御嶽山里宮（王滝村）・山の資料館（南木曾町）  
・山村代官屋敷（木曾町）・本学神社（下伊那郡高森町）  
・中棚荘（小諸市）



私たちが島崎藤村をより深く知るとともに、藤村文学の舞台となった信州・中山道で今暮らす人々に藤村と改めて出会っていただくべく、二つの企画が進行中です。

藤村文学と出会う  
朗読と音楽のひととき

藤村ゆかりの地で藤村作品を朗読、音楽と共にお楽しみいただけます。リサーチを重ねるごとに感じるのは、場所の持つ力の凄みです。藤村が立っていた場所、青山半蔵（「夜明け前」の主人公）が立っていた場所で藤村の言葉を聞いてみる。そのことによって、より深く物語に入る体験ができるのではと期待しています。

第一弾は木曾町の山村代官屋敷。半蔵が幕府の役人に呼び出されて度々訪れる場所です。

第二弾は辰野町の旧小野宿油屋。江戸時代旅籠として使われていた家屋です。小野宿には半蔵のモデルとなった藤村の父正樹が度々訪れていたと言われており、また近くには日本酒「夜明け前」を製造する小野酒造店があるなど、緑の深い土地です。

9月に開催予定の第三弾、第四弾の開催地もきっと驚いていただけるかと思っておりますので、どうぞお楽しみに。

## 第一弾

日時：7月2日（土）  
19時開演  
会場：山村代官屋敷（木曾町）

\*公演詳細は犀の角HPをご覧ください。

## 第二弾

日時：7月17日（日）  
14時開演  
会場：旧小野宿油屋（辰野町）

## 一坪半劇場 『夜明け前』を読む

「夜明け前」という物語をもっと自分たちの身体に染み込ませるために、また上田の街にも染み込ませるために、文庫本4冊に渡る長編小説を少しずつ朗読していこうという企画です。犀の角店内や外（海野町商店街）のお席でライブでお聴きいただけるだけでなく、YouTubeにて配信も行っています。藤村の生まれた日でもある2月17日からスタートし、6月で7回目を迎えました。有り難いことに読み手に立候補して下さる人も増えてきて、賑やかになってまいりました。

まだまだ読み手は募集しておりますので、興味のある方はまずは是非一度犀の角へ聴きにいらしてください。

犀の角YouTubeチャンネルでは過去の配信もご覧いただけます。

日時：6月9日（木）18時  
21日（火）18時

配信：犀の角 youtube チャンネル▶



★当企画では読み手を随時募集しております！一緒に『夜明け前』全巻を読み切りませんか？興味のある方は是非犀の角までご一報ください！

## 参加者募集 古典戯曲を読む会

古今東西の戯曲をひとつ選び、参加者同士で声を出して読み合います。感想を言い合ったり、台詞や作品が生まれた意味を考えたり……。演劇への興味あるなしに関わらず、上田で戯曲を楽しむ会です。途中参加も大歓迎！初めての方もどうぞお気軽にご参加ください。

日時：6月15日（水）19:00～

参加費：300円

+ワンドリンクオーダー

読む戯曲：テネシー・ウィリアムズ  
「欲望という名の電車」

\*戯曲は各自でご用意ください。



## 犀の庭 シマウマこども部 くるくる市うえだ

子どもと一緒に気兼ねなく過ごせる場をひらいている子ども部シマウマ。不要になった物と欲しい物とをくるくる交換する「くるくる市」を開催します。どなたでも当日にお持ち込み、お持ち帰りできます。もらうだけ、あげるだけでもOK！気軽にお立ち寄りください！

日時：6月21日（火）  
10時30分～11時30分

場所：犀の角

参加費：ひと家族100円～

主催・問合わせ：くるくる市うえだ  
Facebook ページはこちら▶QRコード



## SAINOTSUNO COLUMN

犀の角「第六感劇場 太郎山・虚空蔵山編【躑躅忌（つつじき）】」の舞台に、第一回目に続いて躑躅の花を活けた。昨年のコロナ禍に新たな演劇の在り方を模索する中で始まった地元の民話をもとに創られた第六感劇場は「劇場」の概念を拡張し、人の感受性や想像力を一途に信じる犀の角／荒井洋文さんの、なにやら連なって群れ咲く躑躅のような情の熱が形となった、どこからでも想像の翼を持ち、想いを寄せさえすれば観ることができる演劇だ。

昔話や民話には、神話的なかたちで風土や他の生命とのつながりが語られていることが多い。そこでは、獣や魚や鳥や樹々と普通に話したり、とんでもないことをしてかしていたりする。今となっては夢のような時間（ドリームタイム）を、社会的な通念や、常識みたいなものが消し去ってしまうから、奥に眠る大切なつながりを伝えてきた。そのことは「つつじの娘」にも描かれている。かつてはあった世界、今は眠っている世界との通路を、物語は保存し、何度も語られることで、片割れの別世界への回路を繰り返して結び直しているのだ。時々語られることでドリームタイムは浮上する。

『つつじの娘』では象徴として躑躅の花が描かれる。花は常にいろんなものを引き連れて、あちらとこちらの境に咲いている。花は「境」に咲く。みさきの「崎」、先っぽの「先」で、「はな」は「初っ端」の「端」。花の形はよくみると、拡声機のような。地中からだと潜望鏡のよう。花は口であり耳。あちらとこちらを繋いでいる。見えない世界への入り口だ。

夜を徹して山を駆ける娘に扮した演者、彼らの見ているだろう景色を、風の匂いと共に関心、夜だからこそ感じられる五感の昂りを、山の畏れを想像して身震いする。お能で演じられる道行きの実際を彼方に見ているような、待つことに重心を置く舞台。ひたすら待つことが当たり前のような時間。あわいの時間。長雨は眺めとなり、詠めとなっていく。いつしか詩（歌・

うた）が生まれる。詠むは呼ぶことで乞う（恋う）ことでもある。招かれた躑躅の花は、つつじの娘は、ここで一緒に遊び涙し、そうして笑って帰っていくのだろう。それが魂を鎮めることになる。

鎮魂はこのように、そこに依代を立て、型に沿って、自らを静め、故地（home）に戻っていく、つまり“stay home”から始まる。凧だ鏡面のような精神の奥で、まだ一つだった頃のものたちと出会うことができる。鎮魂は、ここに思うものがあることを伝えること。舞台の活け花はこの場を見守り、舞台の夢の時間を回す。お能のワキ方のように。小さな見えないもの達が光となって花にやってきてくれる。躑躅忌は、つつじの娘の魂鎮めであり、人がまだ花と一つだった頃を思い出させてくれる未来と同時に本来のあるべき姿への魂振りでもある。

今回の躑躅は縁あって大切に育てられたお山の躑躅を切らせていただいた。素晴らしい土地だった。立夏の夏日、山は躍動していた。躑躅は喜びで次々と花を開いていく。僕はできるだけ大地の歌のまま活けたいと思う。そういう躑躅に出会えることは幸せなこと。ドリームタイムは物語の中だけではない。すぐ隣を流れている。またいつかきくと笑って巡り合うだろう。

## 塚田有一 Yuichi Tsukada

有限会社温室代表。草月流家元アトリエ、イデーを経て独立。作家、華道家。ランドスケープや作庭、花活け、装飾、オフィスのgreeningなど植物による空間編集を多数手がける。赤坂氷川神社「はなのみち」、花線列島「めぐり花」、「花の座 伝芭」など旧暦や風土に根ざした植物と人の紐帯をたぐる様々なワークショップを開催。

## チケット及びお問い合わせ

## 犀の角 / シアター&amp;アーツうえだ

〒386-0012 長野県上田市中央2丁目11-20

TEL: 0268-71-5221 MAIL: info@sainotsuno.org

営業時間: 7:30~10:00 / 16:00~21:30 月曜定休

